



Title	ブレーズ・パスカル『パンセ』「奇蹟2」の生成過程の検討：断章425～428の構想について
Author(s)	三原，大輝
Citation	待兼山論叢．文学篇．2022，56，p. 95-111
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94867
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ブレーズ・パスカル『パンセ』「奇蹟2」の 生成過程の検討

—断章425～428の構想について—

三 原 大 輝

キーワード：ブレーズ・パスカル／『パンセ』／生成研究／草稿研究／奇蹟

はじめに

ブレーズ・パスカル『パンセ』はパスカルの死後に発見された『キリスト教護教論』のためのメモ書きの遺稿集をもとに編纂された書物である。『パンセ』草稿は当時、その多くはテキストが記された紙片が革紐を用いて束に分類された状態で保管されていた¹⁾。今日の『パンセ』の章にあたるものは、この束に対応している。奇蹟に関する束は3つ存在しており、これらの束にはタイトルが付されていないため、セリエ版²⁾はそれぞれ「奇蹟1」、「奇蹟2」、「奇蹟3」と命名している。この3つの束のうち「奇蹟2」に収められる断章については自筆の草稿、第1写本、第2写本が揃っている³⁾。本稿では「奇蹟2」に収められる断章について文献学的アプローチを行い、この束の生成過程の解明を試みる。パスカルの奇蹟に関する考察は彼の姪マルグリット・ベリエの身に起きた奇蹟とそれをめぐる論争に端を発するものである。この出来事をきっかけにパスカルは『キリスト教護教論』の執筆に至ったと目されている。これらの断章から、パスカルの奇蹟に関する構想を辿ることを目指す。

I. パスカルの執筆作業

未完の書物の生成過程を検討する際には、作者の執筆方法が手がかりとなる。パスカルの執筆作業は、ニコルに関する証言から間接的に伺える。

彼（ニコル）は自分の行うことについてよく考える。誰も彼のように著作を練らなかった。彼が紙に書きつけた最初の創作物は、彼の頭の中で廻るさまざまな思想の形をなさない鉛筆画にすぎない。しかし、彼が1枚目から作成した2枚目では、この混沌が解きほどかれ始める。そして、3、4枚目では書類は完成したものになる。これこそまさに、著者という虚しい名声を得るための苦勞である。この骨の折れる作成方法を彼に教えたのはパスカル氏であるといえる。（ニコル氏はパスカル氏の模倣者にすぎず、知っての通り、模倣者にはオリジナルの価値はない。）というのは、パスカル氏はほとんど同じ方法を行っており、ニコル氏はその欠点までも真似することを讃えていたからである。⁴⁾

パスカルにも初稿から推敲を重ねて文書を作成する習慣があることが窺える。これらの証言と執筆者が行った『パンセ』草稿調査から、パスカルの執筆作業に関して次の仮説が立てられる。パスカルの執筆作業は、アイデアの記録、整理・分類、論説文書作成の3つの段階に分けられる。

第1段階では、大きな紙片に様々なテキストが書きつけられる。この段階においては、頭に浮かび上がったものを、どのようなものであれ書き記すことに集中されているため、自身の想念だけではなく、コメントなども記されている。

第2段階では、テキストが記された紙片はアイデアごとに切り取られ、各々の内容に応じた束に分類される。『パンセ』前段のタイトル付きの27の章に分類されている多数の断章がこれに属するものである。

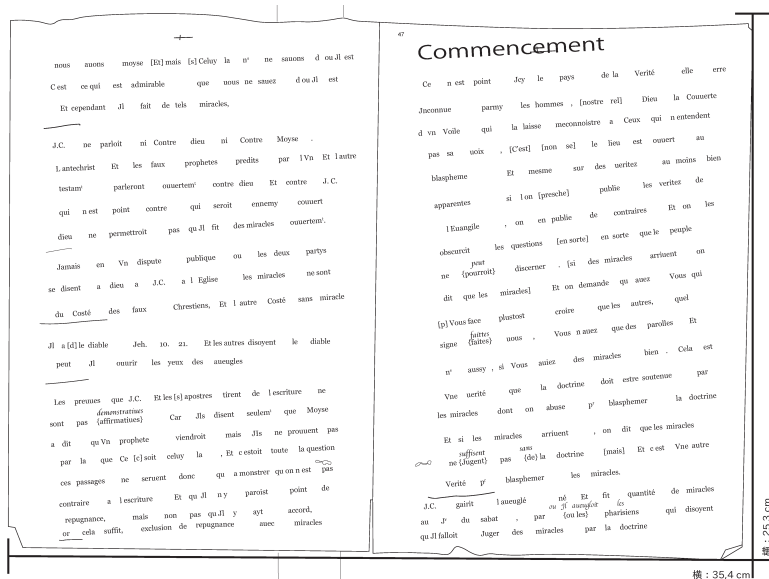
第3段階では、切り取られ、整理・分類された断片的文書をもとに、論説文書が作成される。論説文書においては推敲に適した執筆方法⁵⁾が採られている。また、論説文書作成に際して使用された断片的文書は破棄されてい

ると考えられる。というのも、『パンセ』には「気晴らし」、「想像力」、「二つの無限」のような論説文書が含まれているが、これらと同じテキストが記された断片的文書は、線が引かれ放棄されているものを除いて、ほとんど見当たらない。

「奇蹟2」の束には、上記の第1段階で作成された草稿がそのままの形で残されている断章425、428が含まれている。この大きさの紙片が2つ折りの状態でそのまま保管されている例は他にない。というのも、『パンセ』草稿は2度ハサミの入る機会があった。1度目は上記の第2段階にあたるパスカル自身の手による分類の作業の際に、2度目は1711年に『パンセ』草稿の散逸を防ぐためにアルバム台紙に紙片を貼り付ける作業の際に切り取られている。2度目の作業を経て作成された『パンセ』草稿集の断章の配列は、パスカルの死の時点のものとは大きく異なっている。2度目の切り取りでは、アルバムに貼り付けるスペースの効率が優先され、『パンセ』草稿の多くは本文が見えるようにひと回り小さく紙片が切り取られている。そのため束に保管されていた当時には存在していたであろう紙片の余白部分や束の閉じ穴が損われたりしている。ゆえに2度目の切り取り作業を免れた草稿がそのまま残されていることは極めて稀である。本稿ではこの2つの断章の草稿を中心に、「奇蹟2」に含まれる断章を検討する。

II. 断章 425～428 の配列について

図1断章425 (RO, p. 471)



まずは、断章 425 の形態について確認しよう。紙片の大きさは縦 35,4 cm、横 25,3 cm であり、2 つ折りの状態で右ページ、左ページに分けて使用されていた。束の紐が通されていた穴は、左側ページの下部に見られる。右左のページにはパスカルの直筆で十字の印が記されている。パスカルの執筆方法によれば、この印は紙片が使用される冒頭に記され、紙片の使い始めを意味している。また、右ページの上部には鉛筆で《Commencement》と記されている。これはパスカルの直筆ではなく、写本作成時に筆写生あるいは校訂者が、右ページから書き写し始めるようにとの指示のために記したもののだろう。これと同様の例は後述する断章 428 の草稿上にもみられる。

断章 425 の本文は、パスカルの執筆作業における第 1 段階の作業で作成されたものと考えられる。この段階の作業では、頭に浮かんだものがどのようなものであれ、テキストを書き出すことに集中されている。そして、書き出

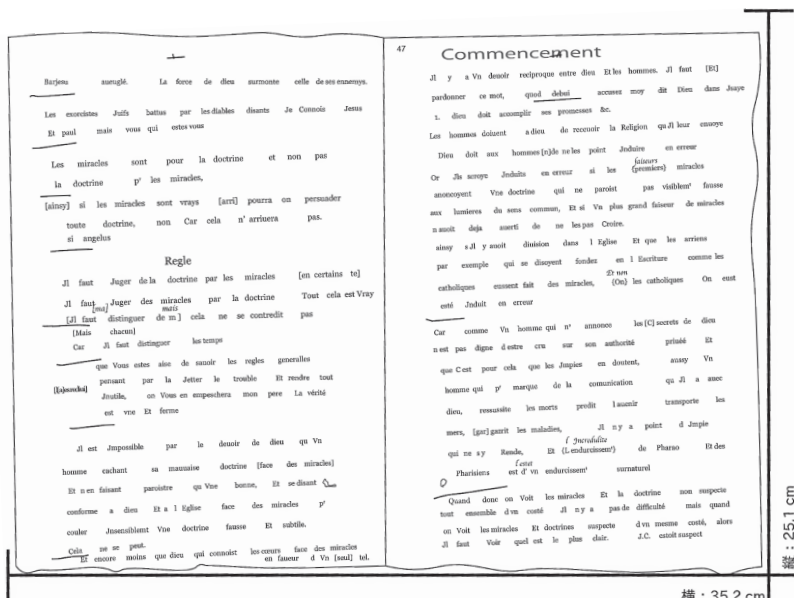
したアイデアの区切れが分かるように、作者自身の手で小さな横線がテキストの左側に引かれている。後の第2段階の作業では、この横線を目印に紙片に鋏が入ることになる。しかし、本断章の草稿は、切り取られずに第1段階での作業の紙片の大きさがそのまま維持されている。他方では本断章には後日に推敲した痕跡がみられる。初稿のテキストの行間に修正した語が書き込まれ、初稿のテキストが横線で消去されている。この修正方法は、初稿を書き上げたあと後日にパスカルが本文に修正を施す際のやり方である。

ここでひとつの疑問が浮かびあがる。なぜ本断章は、後日の加筆修正を経ながらも、紙片が切り取られ分類されなかったのだろうか。この点について考えていきたい。

断章425に続くテキストには写本と校訂本の間で差異が存在している。一旦、『パンセ』草稿集（以下、RO）のページ番号に則して検討する。第1写本と第2写本では共に、RO p. 471、p. 125、p. 461、p. 473の順序で本文が転写されている。対して、多くの校訂本では、RO p. 471の後には、RO p. 473のテキストを配置し、一つの断章として編纂している。第1写本の順序をもとに編纂したラフュマ版『パンセ』⁶⁾に於いても同様である。唯一、第2写本の順序をもとに編纂したセリエ版のみが写本の順序に則して、それぞれの草稿に断章番号425～428を付して配列している。

では、いかにして校訂本の編者たちは断章425と断章428を1つの断章として編纂したのだろうか。

図2断章428 (RO, p. 473)



断章 428 の草稿は断章 425 と似た性質を有している。紙片の大きさは、縦 35,2 cm、横 25,1 cm であり、断章 425 とほぼ一致する。紙片の使用についても同様に 2 つ折りの状態で右ページ、左ページに分けて使用されている。また断章 425 と同様に右ページに《commencement》との指示書きがみられる⁷⁾。本断章も第 1 段階の執筆作業の際に作成され、切り取られることなく後日の加筆修正が施されている。束の紐が通されていた穴は、左側ページの下部に見られる。画像による照らし合わせではあるが、この穴の位置は断章 425 のものと一致する。加えて、断章 425 と断章 428 の上部には「47」と思しき数字が右ページ左上に記されている。つまり、校訂本の編者たちは、紙片の大きさと、この数字が一致していることから 2 つの草稿を 1 つの断章と捉えて編纂したのだろう。一方、写本の順序はどのようなものであろうか。

写本の作成に際して、パスカルの親族であるエチエンヌ・ペリエは次のように述べている。

パスカル氏が宗教に関して検討していたという計画を知っていたので、彼の死後、注意を払いこの題材に関する書き物を集めた。それらの書き物はひとまとめになっており、様々な束に綴られていた。しかし、いかなる順序も一貫性もなかった。…そしてすべてのものは未完成で悪筆であったので、解読するのにひどく苦勞した。

はじめに行ったことは、書き物があるがまま、発見した状態と同様の混乱のうちに、書き写させたことである。⁸⁾

この証言を信用するならば、写本はパスカルの死後に発見された彼の執筆作業の現場が発見された状態をそのまま反映していると考えて良いだろう。加えて、写本作成時点では、『パンセ』初版の出版に向けた作業はまだ行われていないと考えられる。というのも、編集作業は直に草稿を用いて行われたのではなく、草稿の文字を読み易いように作成された写本を基に行われたと思われるからである。⁹⁾ したがって、断章425 (RO, p. 471) の次に断章426 (RO, p. 125)、427 (RO, p. 461)、428 (RO, p. 471) とあったものを、そのままの配列で書き写したと考えられるが、パスカルの死の時点の『パンセ』草稿において断章425の次に断章428があり、あえてその間に断章426と断章427を挿入したとは考え難い。

次に、断章425と断章428の間に位置する2つの断章を確認しよう。

あと、一度半分に切り取られ、整理・分類を経て断片的文書として扱われていたと考えられる。また、元々2つ折りのサイズに切り取られていた紙片に書きつけられていたとしても、作者によって一つの断片的文書として判断され、運用されていたと考えて差し支えない。何れにせよ第1段階の作業でテキストが書きつけられ、そのまま保管されていたとは考え難い。また、縦幅に注目すると、断章425と比べて、断章426は2cm程、断章427は5cm程短い。2つの断章のテキストが初めて紙片に書きつけられたときには、断章425と断章428と同様に、まず紙片の上部に十字が記され、その後にテキストが書きつけられたと想定できる。しかし、断章426と断章427の紙片には、この印が見当たらない。断章426は、1711年のアルバムへの貼り付け作業の際に、台紙の線に合わせて貼り付けるために切り取られたと考えられる。また、断章427は、上部が一直線ではなく不揃いである。元々あった5cm程の紙片にも別のテキストが書き付けられており、その文字を損なわないように紙片が切り取られ、それは別の箇所にも用いられたと想定できる。したがって、断章426と断章427は、アイデアを示す単位として分類され、そして意図して断章425と断章428の間に置かれたと考える方が自然である。

では、断章425と断章428は、後日テキストに加筆修正が施されているのにも関わらず、なぜ紙片が切り離されずにそのままの状態でも保管されていたのだろうか。エルンストの調査によれば、『パンセ』草稿の紙片の透かしからある程度の成立時期が想定可能であるという。¹⁰⁾「奇蹟2」に収められる18枚の草稿の内、2つは不明、1つは別の透かしであるが、デコットらの研究によれば、15枚は小さな花の紋章にRC/DVの文字が入った用紙であるという。¹¹⁾ 上述した4つの断章の草稿はいずれもRC/DVの透かしが入った用紙から成っており、その用紙は1656年末～1657年3月に使用されたものである。¹²⁾ 物理的要素を考慮すると、断章425～428はその第1段階のおおよその成立時期が一致している。そして断章426と断章427は、断章425、断章428の2つ折り紙片の間に挟まれて保管され、これら4つの草稿はひとつの独立した論説文書の構想を示していると考えられる。

では、この時期にパスカルが取り組んだ問題とはどのようなものであったか。この時期は、パスカルが『プロヴァンシアル』第16の手紙（1656年12月4日）を書き上げ、『キリスト教護教論』執筆の準備をはじめたと目される時期である。¹³⁾ パスカルの姉であるジルベルト・ペリエは『パスカルの生涯』の中でパスカルの執筆活動について次のように記している。

私の娘は弟の代子であった。しかし、弟がこの奇蹟により著しく関係するのは、神がこの奇蹟において讃えられ、世の中の大半の信仰が凡庸であった時期に奇蹟が行われたという理由からである。彼が奇蹟から得た喜びはあまりにも大きかったために、彼は奇蹟を確信した。彼の精神は多くの思慮なしには決して何も関心を抱かないので、この特殊な奇蹟の際に、旧約聖書と同様に新約聖書の全般的な奇蹟に関する重要な考えが現れた。¹⁴⁾

ジルベルト・ペリエは、パスカルの姪、マルグリットの身に起きた「聖荆の奇蹟」をめぐる論争については触れずに、彼が『キリスト教護教論』に至る思索をはじめた点を強調している。「奇蹟2」に収められる断章には「全般的な奇蹟」と教理について言及されている箇所がある。この2つの語を手がかりに断章425～428の内容を確認しよう。

III. 断章425～428の構想

パスカルの思想における奇蹟に関しては、塩川徹也による研究¹⁵⁾があり、現在のところこれを上回る研究は現れていない。本稿では断章425～428が奇蹟に関する独立した論説文書の構想を示していることを先行研究に付け加えたい。

断章425の冒頭には次のように書かれている。

ここは真理の国ではない。真理は人々の間で彷徨っている。神はその声

を聞かない人々には正しく認識できないようにするべしで真理を覆った（断章425）。

ここでは宗教的真理について問題提起されている。現世において真理はあまりにも深く隠されているので、どのようにして真理に従うべきかを示していないという。塩川によれば、真理を見出すためには、宗礼や律法という目に見える真理に変換されなければならない。このような宗礼や律法をパスカルは教理と呼ぶという。¹⁶⁾

教理が奇蹟によって支えられなければならないというのはひとつの真理である。奇蹟は教理を冒瀆するために乱用される。そして、奇蹟が起これば、奇蹟は教理なしには十分ではないと言われる。それもまた奇蹟を冒瀆するための別の真理である（断章425）。

このテキストにおいて「奇蹟は教理なしには十分ではない」ことは、論敵のみならず作者も認めている。以降ではイエス・キリストの奇蹟と、それに対する批判について言及されている。

イエス・キリストは、休息日に生まれつきの盲人を癒し、多くの奇蹟を行った。そこから、イエス・キリストは奇蹟を教理によって判断しなければならないと主張するパリサイ人たちを盲目にした（断章425）。

この盲人の癒しの奇蹟は「ヨハネによる福音書」第9章に基づいている。パリサイ人は、パスカルにおいて『プロヴァンシャル』で論争の相手であるイエズス会士たちの祖先と考えられている。パリサイ人もイエズス会士たちも奇蹟と教理の一側面しか見ておらず、奇蹟と教理の相補性によって真理を追求するという構造を見落としていることを批判している。

イエス・キリストと使徒たちが聖書から引き出す証拠は論証的ではない。なぜなら、彼らは、モーセが預言者は到来すると言ったとだけ主張し、そこから、彼がその人であることを証明しなかったからである。このことがすべての問題であった。したがって、これらの章句は聖書に反していないこと、矛盾が現れていないということを示す役に立つだけで、一致があるということは示していない。したがって、奇蹟を伴った矛盾の排除で十分である（断章425）。

聖書から引き出される論証、言い換えれば教理だけでは十分ではないという。モーセの預言に加えて、イエス・キリストが奇蹟を行い、自身がメシアであると示されることで論証的な証拠となるという。また、パスカルの「一致」を求める姿勢は、彼の聖書への読み方が反映されている。¹⁷⁾ というのも、パスカルによれば聖書には字義的に読むだけでなく、表徴的に読むことが求められる。ここでパスカルが目指す一致とは、モーセの預言がイエスによって成就されていることと、そして旧約聖書と新約聖書の間に一致があることを示す表徴であると考えられる。

次に断章425と428の間に位置する2つの断章をみていこう。

イエス・キリストは、聖書は彼を証言しているという。しかしそれがどのような点であるかを示していない。

同様に預言もイエス・キリストが生きている間に彼を証明できなかった。したがって、奇蹟が教理なしには十分ではないならば、生前にイエス・キリストを信じないことは罪ではなかっただろう。ところが、まだ生きていた彼を信じない人々は、彼自身が述べているように罪人であり、弁明の余地はなかった。したがって、彼らは自分たちが抵抗するところの論証を持っていたことになる。ところで、彼らは聖書を持っていなかったが、奇蹟のみがあった。したがって、教理に背反しないかぎり、奇蹟は十分である。ゆえにそれを信じなければならない（断章

426)。

聖書においてイエス・キリストが明白には証言されていないために、イエスが生きていた時代には自らの神性を証明するために奇蹟を用いていることが取り上げられている。しかし、ある時には奇蹟を教理によって、ある時には教理を奇蹟によって判断するという矛盾が生じる。この2つのみが真理の基準となることはできない。塩川によれば、ここで宗教の原理あるいは本質的真理が必要となり、そこで、奇蹟の最終的標識として、パスカルは神、キリスト、教会を挙げるといふ。そして、「意味ある総体」を仲立ちにしてはじめて奇蹟の真偽と意味との判定が可能になるという¹⁸⁾。続く断章427、断章428では聖書の章句をもとに、宗教や教会について言及されている。

私たちの宗教は賢くかつ愚かである。賢いというのは、最も学識に富み、奇蹟や預言に最も基礎を置いているからである、云々。愚かであるというのは、人々を信仰させるものが、必ずしもそれらのもの（奇蹟、預言など）ではないからである。それらはこの宗教に属さない人を罪に定めるが、信仰しない人々を信じさせない。その人たちを信じさせるのは十字架である。「十字架の空しくならざらんために¹⁹⁾」（断章427）。

断章428では断章425に続き、聖書の章句を引き、それらにコメントを付す形で、聖書に記される奇蹟に関するエピソードが記されている。断章427は断章428の論旨を補強する役割を担っている。そして断章428の最後には、「規則」というタイトルが立てられテキストが記されている。

規則

奇蹟によって教理を判断しなければならない。教理によって奇蹟を判断しなければならない。これらすべては真である。しかし、そこに矛盾はない。

なぜなら、時代を区別しなければならないからだ（断章428）。

教理が容疑を受けたときには、奇蹟がそれを判定し、奇蹟が曖昧であるときには、教理がそれを決定する。このように奇蹟と教理には相補関係にあり、このような規則には矛盾はない。その理由は、塩川によれば「キリストと教会がまだこの世に出現しておらず、従って少くとも明示的には人に知られていない時代があった。だから奇蹟を判定するのにつねに同一の標識を用いるわけにはいかず、それが起った時代を考慮に入れなければならない²⁰⁾」からである。

VI. 結論

断章 425 ～ 428 における主題は宗教の真理をどのように判断するかである。執筆時期を考慮すれば、奇蹟と教理を問題にするイエズス会士たちを意識して作成されていたことにも肯ける。断章 425 と断章 428 では、聖書をもとに奇蹟について言及し、そこから「規則」が帰納されるという構成になっている。断章 426 には聖書におけるイエス・キリストの証明に関して、断章 427 にはキリスト教教会と神の要素を加えて奇蹟について言及されたテキストである。

以上述べた『パンセ』草稿の実証的検討から一連の断章の成り立ちについて次のように考えられる。まず断章 425 と断章 428 が先に作成されており、この 2 枚の紙片でひとつの文書が構成されていた。その後、断章 426 と断章 427 が、結論部分までの一連の論述を補強するため、断章 425 と断章 428 の間に挿入され、ひとまとめに保管されていた。そしてこれはひとつの論説文書の構想を示していたと考えられる。この構想を維持するために、後日の加筆修正では断章 425 と断章 428 の紙片が切り取られることなく行われていた。では挿入された 2 つの断章をどこに組み込んで読むべきであろうか。この点については明言できない。というのも、先述したように、これらの草稿はパスカルの執筆作業における第 1 段階で作成され、第 2 段階で分類された

ものである。これらの断章が第3段階において論説文書となる際には、これらの紙片の順序が検討され、それらをもとに作成されることになる。そのため、第1、2段階においては厳密なテキストの整理がなされる必要はない。また、論説文書作成時までには新たな想念が組み込まれる可能性があるため、編集できるように残しておく必要がある。ゆえに、第2段階においては執筆者本人が再び紙片を参照した際に、その構造がわかるように保管されていれば十分である。つまり、これらの4つの草稿は一種のフォルダのようなものを形成し、執筆途中にあるひとつの文書の構想を示しているといえよう。

[注]

- 1) パスカル著、『パンセ(上)』、塩川徹也訳、岩波書店、2015年、p. 471。
- 2) 『パンセ』の章、断章番号については Blaise PASCAL, *Pensées opuscules et lettres*, éd. Philippe Sellier, Classiques Garnier, 2019, (以降、セリエ版) に従う。
- 3) フランス国立図書館の電子図書館「ガリカ」にて公開されている第2写本の複製版には、現在のところ一部のページに欠損がある。本稿で検討する断章に該当するテキストが部分的に欠損箇所にあるため、電子版『パンセ』(<http://www.penseesdepascal.fr/index.php>) を併せて参照した。
- 4) Sainte-Beuve, *Port-Royal*, éd. Robert Laffont, S.A., Paris, 2004, tome I, p. 1084.
- 5) Yoichi Maeda, 《Le premier jet du fragment pascalien sur les deux infinis》, *Études de Langue et Littérature française*, n° 4, 1964, p. 1-19.
- 6) *Œuvres complètes*, présentation et notes de Louis Lafuma, Seuil, 1963.
- 7) 『パンセ』草稿のなかには、紙片が2つ折りの状態で使用されていた草稿が、紙片が再現されたものを含めるといくつかある。いずれも右ページからテキストが書き付けられている。欧文は左から読む言語であるのに、なぜこれらの紙片は右側から使われているのだろうか。私たちの多くと同様に右手にペンを持ってテキストを書くならば、書いたものを摩擦によって損なわないために左ページから右ページへ続けるのが最適だろう。だが、パスカルは徹底して右ページからテキストを書き記している。また、論説文書の加筆されたテキストも紙片の左側に記されている場合がほとんどである。つまり彼もまた左利きの天才の1人であるのだろう。
- 8) *Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets* : éd. Port-Royal (初版), 1670, 《Préface》.
- 9) Jean Mesnard, 《Aux origines de l'édition : les deux copies》, dans *Les 《Pensées》 de*

Pascal ont trois cents ans. Bussac, 1971, p. 1-30.

- 10) Pol Ernst, *Les Pensées de Pascal, géologie et stratigraphie*, Oxford, 1996.
- 11) *Pensées*, éd. Électronique par D. Descotes et G. Proust, <http://www.penseesdepascal.fr/index.php>, 2011.
- 12) セリエ版 p. 776.
- 13) Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, 3^e édition, revue, mise à jour et augmentée, Société d'Édition d'Enseignement Supérieur, 1993, p. 369.
- 14) *La vie de Pascal*, dans *Œuvres complètes*, tome I, éd. Jean Mesnard, Desclée de Brouwer, 1964, p. 618 (第2稿). Cf. *ibid.*, p. 583 (第1稿).
- 15) 塩川徹也、『パスカル 奇蹟と表徴』、岩波書店、1985年。Cf. Testuya Shiokawa, *Pascal et les miracles*, Éditions A.-G. Nizet, 1977.
- 16) 塩川徹也、前掲、p. 190。
- 17) 「ある著者の意味を理解するためには、あらゆる相反する章句を一致させる必要がある。したがって、聖書を理解するためには、あらゆる相反する章句が一致する意味を持つ必要がある(断章289)。」
- 18) 塩川徹也、前掲、p. 195。
- 19) 「コリントの信徒への手紙1」第1章17節。
- 20) 塩川徹也、前掲、p. 196。

(大学院博士前期課程学生)

Résumé

Étude génétique de la liasse «Miracles 2» des *Pensées* de Blaise Pascal :
la conception des fragments 425-428

Daiki MIHARA

Les *Pensées* de Blaise Pascal sont une œuvre posthume et inachevée, compilée à partir de notes trouvées après sa mort et destinées à l' *Apologie de la religion chrétienne* contre les impies. Ces manuscrits ont été primitivement réunis en un certain nombre de liasses retenues à l'aide de lanières, et c'est de cette répartition matérielle du texte qu'est issue sa division actuelle en chapitres. Dans cet article, nous soumettons à une approche philologique les fragments qui constituent la liasse nommée «Miracles 2», et tentons d'en élucider la genèse. La réflexion de Pascal sur les miracles a pour origine un événement survenu à sa nièce, Marguerite Perrier, et la controverse qui a entouré sa qualification comme miracle. C'est même le point de départ de toute son *Apologie*.

Ce que l'on sait de la méthode d'écriture d'un auteur permet d'avancer des conjectures sur la genèse de ses livres inachevés. La composition des textes de Pascal peut être divisée en trois étapes : jeter des idées sur une feuille, les organiser en segments discursifs, puis les classer en liasses afin de produire un document rédactionnel. L'examen des manuscrits des *Pensées* nous conduit à supposer que les manuscrits des fragments 425-428 sont nés lors de la première étape de son travail, avant d'être articulés durant la deuxième étape. L'ultime étape aboutit à un document rédactionnel par l'ordonnancement définitif des pièces et la mise en forme d'un discours structuré. De tous les manuscrits des *Pensées*, les fragments 425 et 428 présentent la particularité d'être les seuls à avoir conservé la même taille que les papiers sur lesquels Pascal a travaillé lors de la première étape. Ils semblent qu'ils correspondent à la rédaction primitive du texte, et qu'ils aient été liés en une continuité rompue ensuite par l'insertion des fragments 426 et 427, afin de renforcer l'enchaînement des arguments jusqu'à la conclusion : on voit ainsi émerger, au fil du chantier génétique, l'unité et la cohérence du document éditorial.